「我が家は今宵も営業中」

夜明けのクリスマス　（40 代）

深夜 0 時を回った頃、玄関の鍵を回す音がして、扉が遠慮がちに閉まった。私は、布団の中で眠りに落ちかけながら、夫が帰宅したのだなと思った。しばらくして、ビニール袋が擦れ合う音と鼻歌が聞こえてきたので、思わず笑ってしまった。

夫は買いだめをするのが好きだ。食料品や日用品の買い物は、ちょっとしたストレス発散になっているらしく、仕事終わりにこっそり買っては自分の部屋に隠している。私はその隠し場所を知らない。だが、10 才の息子は物心ついたときから知っているらしい。

私が、「あっ、明日の運動会用にスポーツドリンク買おうと思ってたのに、すっかり忘れてた……」と呟くと、「ちょっと待ってて！」と言って走り出す息子。すぐにペットボトル 2 本を小脇に抱え戻ってきた。

「これでいい？」と言う息子に、「パパのところからもらってきたの？勝手に取ってきちゃって大丈夫？」と尋ねると、「うん、平気」と、しれっと答えた。

翌日、朝ごはんを食べていると夫がおもむろに手を上げ、口を開いた。

「報告があります。昨日、私の部屋に泥棒が入りました。何か知っている人はいませんか？」

顔を見合わせてニヤニヤする息子と私。そして、知りません、と答えた。

数日経った土曜の昼下がりのこと。

「カップラーメンあったかなぁ？」と言いながら、息子がふらふら歩いて行った。すぐに夫の「えっ？！ちょっと待った！ひと言くらい何か言いなさいよ！」という、素っ頓狂な、抗議めいた声が聞こえた。慌てて現場に向かう私。どうやら、例の盗人が、白昼堂々、家主の目の前で犯行に及んだらしい。

「このカップラーメン、いただいてもいいですか？」

「どうぞ」と紳士な夫。なんだか笑ってしまう私たち三人。

そして今宵も、盗人は何かめぼしいものはないかと部屋を彷徨っている。家主もまた、月明かりの下、ドラッグストアをはしごする。